ガルパン　オリジナル学園艦短編

京都府南部民

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今になってガルパンにハマり出した結果、なんか頭の中で色んなオリジナル学園艦とかチームとか考えちゃいました。

設定とか色々無茶苦茶やけどアンツィオよろしくノリと勢いだけで作ったから許して……

目　次

自主管理教育組合 ―― 1
自主管理教育組合2 ―― 10
自主管理教育組合　設定 ―― 14
テキーラ女学園 ―― 18
テキーラ女学園2 ―― 25

自主管理教育組合

自主管理教育組合

一見すると、何かしらの市民団体かそれこそ組合だと思ってしまうような名前であるが、れっきとした学校法人であり、学園艦である

兵庫は明石市に本拠をもつ同学園艦の経緯は非常に複雑である

そもそもこの学園艦ができたのは1年前であり、統廃合によって生まれて新しくできた……再編された学園艦なのだ

グラード学園、ヴニク女学院、エヴォ塾、ブリャナ高専、五律工業高校、ヴェルギナ高校

これら6つの学園艦が統合されたことによって自主管理教育組合が誕生したのである。

その原因はやはり各学園艦の経済的な事情によるところであった。

この事態を重く見た各学園艦生徒会は共に兵庫県に本拠を持つという点から協議を何度も行い、統廃合へ至る事を決定した。文科省へ申請した際に受付の役員が目を丸くした事は言うまでもない。

2つの学園の統廃合は聞かない話では無かったが、それが6つ同時に申請したという事に文科省は辻廉太なる役人を担当に付け、一連の統廃合の指揮や調整にあたらせる事とした。

結果としてそれは成功したと言える。学園艦の売却によって得た収入は新しい学園艦を購入してもお釣りが出る程であったし、一つの学園艦に6つの学園生徒が集まる事で学園内の経済は活発化。予算は初年度にて黒字を出す事となった。

辻廉太を統廃合に尽力『した』人物とするならば、現在進行形で尽力『している』人物がもう一人いる

現自主管理教育組合生徒会長、南千歳である。

統廃合当時、ヴニク女学院付属中学校戦車道部部長兼生徒会長であった彼女は統廃合を歓迎しており、各学園艦生徒会に祝意の手紙を送る程であった。

翌年、進級すると同時に、生徒会長選に1年生ながら立候補するという冒険に打って出たが、この冒険はたちまち学園内の興味の的とな

り知名度を大いに高めた。加えて、彼女の社交的な性格、戦車道で鍛えた声の張り、中学校生徒会長という学園艦経営の一端を担っていた事を評価され、見事自主管理教育組合の初代生徒会長として名を刻んだのである。
「それでは定例会議を行いたいと思います」
「「「「はい」」」」
　２年目も生徒会長に当選した事により、南にはどこか風格と貫禄とちょっぴり疲労の気が見せ始めていた
「予算についてですが、このままを維持し続けて行けば少なくとも向こう１０年は黒字であるというデータが算出されています」
「となると次なる問題は……」
「予算の分配やな」
　南は生徒会そのものを改革し、学園艦の全てを生徒会により決定するのではなく、各部活動や委員会のトップとの協議によってその意思決定を学校経営に反映させるという内容であった
「剣道部としては規定通りの予算で向こう2カ月は大丈夫やで」
「ごめんやけど、ちょっと吹奏楽部に融通してくれへんか？来週でかいイベントあるからバスとか借りやなアカンねん」
　部長と委員長がそれぞれの要求する額を伝えていき、南は手元にあるノートと電卓を駆使して、予算との兼ね合いを判断している
「清掃委員会さんの高圧洗浄機の導入は良しとして、植物委員会さんのはちょっと……」
「あぁ、別にそこまで気にせんでええで。ただこの前舗装した道に街路樹植えよって意見が多少出てたぐらいやし」
「すんません。それと情報システム統括部さんですけど…これ本当にいるんですか？」
「そりゃ要るから言うとるんや。脅すようでアレやけど、このソフト入れんかったらこれから増え続けるであろう生徒と在校生卒業生の情報全部とんでまうで？」
「うーん、分かりました。では、そのようにさせていただきます」
　予算の分配は恙なく行われていく

学園艦が黒字であるが故にスピーディーに予算決議は終了した
「さて、それでは次の議題として、生徒からの目安箱の意見を読んでいきましょう」
目安箱にはどっさりとお便りが投稿されており、部長委員長は手近なものから軽く読み始める
「学食のバリエーションを増やしてほしい、やと」
「学園艦内の移動をより早く効率的にする為にエスカレーターや交通機関の新設の声も多数あがってんなぁ。学食よりこっちのほうが急務ちゃうか？」
「学食は真っ先にコストカットの対象やったからなぁ」
「とはいえ、カレーと牛丼だけっていうのはちょっとなぁ。男子はともかく女子には重いメニューなんやろ？　現に学食要求の性別欄は殆ど女子やで」
「図書館の拡張もあるなぁ。一つの本に１０の予約が必ずついてる状況になってるみたいや」
「風紀委員が厳しすぎるとかもあるで」
「当然の職務を遂行しているまでだ。遅刻や服装の乱れを許認しては、何のために風紀の二文字を冠しているというのだ」
部長委員長の会議に対して南が口を挟む事はまずない
彼女の仕事は会議によってまとめられた各提案に対して、予算を提示した上で是非を判断するのみであって会議そのものへの発言は、生徒会の権限の強化であると考えていた。統合して間もない自主管理教育組合の不満を一手に引き受ける事はハイリスクであったからだ。
それならば、会議から提案までを部長委員長に任せた方が、不満を分散させるという意味では効果的であった
「学食のバリエーションは現時点の予算とそして学園艦の状況から鑑みて、重要な事案ではないと考えます。しかし、学園艦内の移動手段の拡充と図書館の拡充は早急に着手すべきものであります。そして風紀委員会の皆々様がたは、今後より一層の働きを期待している次第でございます」
この決定に異議を唱える者は一人もいなかった

学食面のコストカットは南が生徒会長選において常に掲げていた事であり、多くの生徒はそれも含めて支持していたのだ。それに学食への要望は何も強いものではなく、あくまでできる事ならしてほしい程度のものである事を部長委員長は感じ取っていた
「それではこれで定例会議を終わらせていただきま」
「入るぞ、千歳」
ドアを勢いよく開けて入ってきた人物
軽井照子。かつて南千歳と共にヴニク女学院附属ネクタイ女子中学校戦車道部に所属し、街中野原を駆け巡った仲だ
生徒会に所属しているという訳では無いが、南と友人である事から頻繁に出入りしており、周囲からは事実上の生徒会役員であると見なされている
「照子。会議中は入ってくんなって言ったはずやろ」
「さっき教職員組合の方から連絡があってな。伝えに来た」
「教職員組合から？」
自主管理教育組合の運営や会議において、教職員組合は委任状を出すという形でそれに応えてきた
日頃の職務が忙しく、参加する程の余裕が無かったからだ
「それで、どんな？」
「まぁ、これを見ればわかる」
「ふむ……」
書類の最初３文字はこうであった。戦車道
その文字に彼女の体に震えが走った
南千歳自身、元戦車道部部長であったという事もあって、毎年行われる戦車道大会は生徒会長として多忙に追われていた時の数少ない娯楽であった
特に決勝戦はその多忙から無理矢理時間を作ってでも見に行ったほどだ
「教職員組合からの『提案』や」
「……」
「自主管理教育組合戦車道部の創設」

その言葉に会議室がどよめいた
戦車道
その響きは聞きなれた物ではあるが、この学園艦には無い存在であった
「そして、その初代部長には経験者である南千歳の就任を望む」
「……」
「なぁ、どうや」
部長委員長が互いに顔を見合わせて、小声で話を始める
―確かに南生徒会長なら―
―だけど、別に何かの大会に出たって訳ちゃうんやろ？―
―いや、それはネクタイ女子中学校の戦車道部が小規模過ぎたってだけで、個人としての腕は相当なモノやって聞いたで―
「皆さん、静かにしてください」
その言葉で静かにはなったものの、南を見る目は明らかに今までのそれとは違う
「何にせよ会議は終わりです。解散、各部員各委員に予算の結果を通知、広報委員会は一般生徒に伝えるように」
南はそう告げて、足早に去っていった

「(まったく…無用な事を)」
帰り道、南はさっきの事を思いだし……いや、頭から離れられずにいた
戦車道部の創設、初代部長就任
何とも……嬉しいお話である
「あ！会長！こんにちは！」
「おぉ、君らは……1年生か。こんにちは」
会長も2年目にさしかかるという事もあって、南千歳の名前と顔は広く知れ渡っており、そのフレンドリーな『表面』からこうして声をかけられる事は珍しい事ではない
「あ、あの！噂で聞いたんですけど！あの噂って本当ですか！」

「あの噂……？」
「戦車道部の創設と、会長が部長を兼任するって噂です！」
「誰から聞いた？」
「だ、誰って、もう艦内中で噂になってますよ！」
何ともよろしくない事になっていた
不正確な噂、それも自身に関わる事となればなお悪い
「私、会長が部長になったら必ず入部しますから！」
「応援してます！」
「あ、おい！」
1年生を呼び止めるも、彼女たちはキャッキャッと声を挙げながら走り去っていった
「良くない、良くないぞ」
本当は嬉しいのだ
かつては自分も所属した戦車道
その思いは今も変わっていない
だが、だが、だが
「(私はもう生徒会長だ)」
中学時代とは違い、学園艦の運営の一端ではなく全体を担わなければならない立場である以上、2足の草鞋を履いて、果たして実現できるものなのだろうか
彼女は自嘲する。私はここまで臆病になったのか、と
日頃の会議や選挙演説での居丈高な態度とは裏腹に、南は自身の事を疎かにするようになったといえる
今、彼女が戦車道に関わる術があるとすれば、戦車道連盟のホームページを見たり、動画サイトで数々の戦いを見て、心を慰める程度だ
「(ダメだダメだ。私は予算の分配と、各部各委員会に指示を出す事が仕事なのだ)」
そう思う心中に、彼女の意気地の無さが表れていた
戦車道と言う言葉さえ聞かなければ彼女はこう思う事も無かったのである
『是非、やらせてください』

次の日、いつも通りに授業を受け、生徒会室にて書類作成を行っていると乗り込んできたのは部長と委員長たちであった
「今日は会議の予定は一切無いはずだが」
「生徒会長！どうか戦車道の件引き受けてください！」
単刀直入に言われたその言葉に、南は無表情で見つめざるを得なかった
「確かに現在戦車道は流行りを見せてはいるが、ブームだけで人を集めても……」
「流行りで言っているわけではありません！」
「今後の、この自主管理教育組合に必要だからです！」
部長と委員長たちが訴えた内容はこうであった
・自主管理教育組合が性急な統廃合によって生まれたものは事実であり、一般生徒並びに各部各委員会の内部では出身学園艦によっての対立が少なからず存在している事
・自分たち部長委員長は出身学園艦がバラバラであるが南千歳によって、共に会議する事ができている。しかし、自身の部や委員会ではその対立を収めきれてはいない事
・南千歳が出身学園艦による混成の戦車道部を作り上げ、何かしらの実績をあげる事ができれば自主管理教育組合の対立解消に影響を及ぼす事
以上の3点である
「お願いです！生徒会長！」
「私どもの不徳による部分が多いのは事実です！　しかし、このままでは自主管理教育組合がまたも分裂してしまいます！」
「……」
請願と嘆願を簡単に切り捨てられるほど、南千歳は非情では無かった
しかし、では簡単に引き受けたとして戦車道と生徒会長が両立でき

るのか
　彼女が昨日の教育組合の提案に即答できなかった理由の一つがこれであった
「しかし、私は生徒会長としての仕事が……」
「か、会長！　生徒会のお仕事は私たちが今以上に頑張ります！」
「会長が戦車道時代のお話をされている時、すっごい楽しそうでした……」
「会長だって生徒です！全ての生徒が笑顔の思い出を残せる自主管理教育組合！それがスローガンじゃないですか！」
　生徒会の面々の言葉は何より南千歳の心を抉った
　自身のスローガンが、まさか自身に帰って来るとは思わなかったからである
「なぁ、千歳。もっかいやろうや」
「照子……」
　悪友の言葉に千歳は更に考え込む
　だが、その顔はどこか冴えている。部長委員長生徒会役員はその顔を見て喚くのをやめた
　軽井はそれを柔和な笑顔で見守っている。付き合いが長い故であろうか
　おもむろに南は立ち上がり、眼下の自主管理教育組合の風景を一望する
「私は確かに戦車道の経験があります。しかし、それは1年も前の事。ブランクは勿論、勘も鈍り、この2年で結果を出す事は必ずしも容易な事ではありません。加えて、生徒会という役目そのものを放棄するわけにも参りません」
「会長……」
「条件がいくつかあります。部長はそこの軽井照子が就任する事。私は戦車道そのものの指揮を執る事」
「では、会長……！」
「戦車道の件、形を変えてお受けいたします」

自主管理教育組合戦車道部の創設はこのような経緯の下に生まれたのである

自主管理教育組合2

「所属は？」
「恐らく、プラウダ」
「チッ、この時期にいらん事を……」
　戦車道部専用会議室に入ると既に車長の面々が待ち構えていた
「同志ユーゴ、この度の招集一体いかなる用件でございましょうか」
　グラード部隊隊長、ベオ
「車長集めて会議するなんて何時ぶりやろなぁ」
　クラバット戦車隊隊長。ドゥブロ
「今日は折角飛ばしたろうと思ってたのに……」
　ブリャナ遊撃隊隊長。リュー
「（練習が無くなった思えば楽なもんか）」
　エヴォ五律連合第1隊長。ポド
「みんな！ちゃんと座りぃや！同志が来てるねんで！」
　エヴォ五律連合第2隊長。サラ
「まぁ、結果から言うとネズミがいた」
「ネズミ？」
「他校からのスパイが……！」
　ベオとドゥブロを除いたほとんどが動揺した
　戦車道において諜報活動は認められているのは知っていたが、いざ起こってしまうと浮足立ってしまうのは、未だ彼女たちが戦車道の味わい方を知らないからであろう
「おい」
「はっ！連れてこい！」
　軽井に指示を出すと2人の小柄な少女たちが入室した
　目と手と口が縛られており唸り声をあげている
「外せ」
「…ハァ！　わ、我々は何もやっでいません！」
　最初の言葉は自己弁護であった
　しかし、それはユーゴの耳には届かずゆっくりと近づく

「タバコは?・吸った事があるかね?・」
胸ポケットから葉巻（ココアシガレット的な）を取り出し見せ得つける
少女は首を横に振り否定の意を示した
ユーゴはそんな彼女の頭を掴み無理やり葉巻を咥えさせた
無論、抵抗は当然の事であり咥えられた葉巻は床へと転がる
「君は、酒を嗜んだことはあるかね?・」
戸棚からボトルを取り出し、今度はもう一人の少女へと近寄った
この少女も首を横に振った
ユーゴは少女の口に無理やり酒と称したボトル（中身はオレンジジュース）を口に突っ込み、これでもかと喉へ注いでいく
酒と思い込んだ事、そして無理やり飲まされている事から、少女の防衛本能が働いた
ボトルから口を外し、咽たかのように吐き出す
「独房に入れておけ」
「はっ！　おい、とっとと立て、歩け！・」
少女の退室が確認されると、もう一度席に座り直した
「同志ユーゴ、彼女たちは一体どこの所属なのですか?・」
「プラウダだ」
「プラウダぁ?・」
「あいつらと試合する予定なんてここしばらく無いやろ」
「諜報に力入れたんやろ。情報は1分1秒で更新されるもんやからな」
「それにしても解せませんな。新参者・寄せ集めの烏合の衆、こう呼ばれている我らを偵察する程の余裕があるという事でしょうか?・」
「聖グロならともかく、プラウダにそんな奴らがいるなんて聞いた事無いぞ」
「あるいは、ウチらをそこまで舐めてるかやな。それやったら説明できるやろ」
「（それが一番正解に近いかもしれんな）。何にせよ、だ。こうして車長に集まっていただいたのは、この件をどう対応するかだ」

それまで身を乗り出していた車長たちも、対応という言葉を聞くと椅子に深々と座った
何せ、相手は強豪校を名乗るにふさわしいプラウダ高校
下手な対応をすれば、いずれ巡り合うであろうその時に過剰な砲火を浴びせられるかもしれないのだ
「何をウジウジ悩んどんねん！　あのジャリ2人をウチらの練習の的にすれば、それで済む事やんけ！　なんやったらその映像を、プラウダの連中に送り付けるんや！」
「馬鹿を言うな。事をいかにして穏便に済ますかという話をしているのに、相手を逆上させてどうする」
ドゥブロとベオの応酬は極論ながらも会議の発言を促したのは事実であった
それぞれが自身の思う対応策を述べていく
「同志ユーゴ、あんたはどう考えてんねん」
「うん？　私か？　そうだなぁ……」
ドゥブロからの質問に、ユーゴは少し間を開けて答えた
「できる事なら、このままを維持したい」
「このまま、ですか」
「強硬策はプラウダ側の士気をかえって上げる事になるだろう。だからと言って、彼女たちをこのまま帰しては愚かである。プラウダ側の責任を問うたとしても、向こうは「2人の独断専行」と言えば、我々には反論の余地がない」
車長たちはまたも椅子に座り込んだ
有効な一手とは中々思いつかないもので、唸り声をあげたり、水を何度も何度も無意味に飲むばかりである
そんな時、ユーゴの脳内で何かの閃きがあった
「決めた。こちらからも偵察を出そう」
「同志ユーゴ、お言葉ですが我々の中で隠密行動の心得のある人材は一人も……」
「そう、隠密行動をする必要は無い。むしろ、堂々と見に行けば良い」
「それはどのような意味で？」

「まずはだな……」
車長がユーゴの周りに集まるその案を聞いた
自主管理教育組合とプラウダ高校の戦いは、情報戦という形で始まったのである

自主管理教育組合　設定

『自主管理教育組合』

６つの学園艦の統合によって生まれた学園艦

６つの学園艦の校風がそのまま受け継がれており、多様な風景と学校生活を送っている。

全体の校風としては、あまり他校と交流する事は無く、生徒による自主性を重んじる校風。

学園艦の運営は生徒会を中心とした部長と委員長による協議であり、予算の分配はこの協議で決まる

戦車道は最近創設されたものだが、経験者が数多く（むろん初心者も）参加しており、戦車も多数保有している。各部隊の隊長と司令官にのみソウルネームを名乗る事が許される。

創設されて間もなく、ましてその理由が学園艦内の政治的な要因も含まれている為、第６３回戦車道全国大会への参加は見送る事を決意し、今年は練習試合と別枠での大会への参加を図る。

保有戦車

Ｍ３Ａ３　８両

？１５／４２　２両

ＴＫＳ　３両

Ｈ３９　６両

Ｔ―３４／８５　１０両

Ｔ―３４／７６　５両

『ユーゴ』

自主管理教育組合初代生徒会長にして戦車道部初代司令官。ヴニク女学院附属中学校出身。現在２年生。『ユーゴ』はソウルネーム

カリスマによって自主管理教育組合を束ねていると言っても過言ではない人物であり、常に予算の配分や自主管理教育組合内の出身学園艦による対立に神経をとがらせている

戦車道において司令官として大局を見据えた指示を出すが、ここぞという時には伝家の宝刀である自主管理作戦を行う。この作戦はあ

らかじめチームの役割を決め、その後は各自の判断による行動を認めるという内容である。他校からは寄せ集めのやけくそと罵られているが、指示への専念、クラバット戦車隊の突撃、グラード部隊の遅滞戦術、エヴォ五律連合隊の山岳戦、ヴェルギナ偵察隊の情報収集、ブリャナ遊撃隊といった風に役割を専念させる事で多数の戦果を挙げている。

他校との交流にはさほど興味が無いのか、戦車道の試合以外には積極的ではない。サンダースに訪問した事もあったが、予算管理について意見を聞きに行った程度であり、戦車道とは全く関係がない。

実は元々他校との交流自体は積極的に考えており、複数の高校との合同練習試合を計画していたが、予定日にそれらの高校がプラウダと合同練習を行うという事になった為に憤り、他校との交流を最低限かつ消極的なものにしている。

良くも悪くも裏表のある性格で、他校や信頼していない人物には笑顔とハグで接するが、そうではない人物には素の面である落ち着いた（冷徹な）態度をとる。

ここ最近の悩みは、多数の戦車購入と戦車道部の活動における出費と重戦車がいない事である。

本名は南千歳

『軽井照子』

南千歳の中学時代からの友人。戦車道部初代部長。２年生

戦車道そのものには現在参加していないが、部長として裏方の仕事をしてユーゴのサポートに務めており、絶大の信頼を受けている。いずれは何かしらの戦車に搭乗するつもりではあるが、今はデスクワークに追われている。

『ベオ』

元グラード学園戦車道部。３年生。

初期に入部したという事もあって戦車道部内では古参の部類に入る。「先輩方の想いを受け継ぐ」という事で自主管理教育組合戦車道部の制服ではなく、グラード学園戦車道部部長専用服を着用してい

る。Ｍ３Ａ３を８両任されており、グラード部隊の隊長。戦車道そのものは、よく言えば堅実、悪く言えば臆病ともいえる待機戦術を好んでおり、ユーゴより特に指示が無い時と自主管理作戦が行われた場合には、森の中や市街地の入り組んだ所で息を潜める様に隠れている。この臆病さを買われて何度かフラッグ車を任せられる事もある。方針の違いから、後述のドゥブロとは何度も衝突しているが、その攻撃性を認めており「素人故というのもあるかも知れないが、あれは本物だ」と称賛している。

ユーゴが本年度の戦車道全国大会への不参加を決意した事に対して不満を抱き、時に反発していた。しかし、ユーゴ自身の口から、戦車道が創設された背景と強豪校との差を訴えられ、葛藤の末に納得。以後は後輩たちにグラード学園戦車道部の精神を叩きこむ事を自身の戦車道と考え、厳しい練習を行っている。

本名は野比塞子

『ドゥブロ』

出身学園艦はヴニク女学院付属中学校。１年生。

戦車道に興味はかけらも無かったが、艦内のニュースを聞いた事をきっかけに入部を決意。１０両のＴ―３４／８５によって構成されるクラバット戦車隊を率いる隊長。その破壊衝動ともいえる攻撃性は異常なものであり、戦車隊が１０両と大編成であるのはこれが認められているからである。もっとも大編成であるが故に、車両制限の対象に真っ先になっており、彼女の真価は準決勝決勝で発揮されると期待されている。方針の違いから、ベオとよく衝突しているが自身の立場や役目を理解しており、ベオがフラッグ車を務めているときはグラード部隊を守ろうとする。

本名は溝口地亜

『リュー』

ブリャナ高専出身。２年生。

戦車道に入部した理由は「新しいスピード感が欲しかったから」との事。

休日は自転車でサイクリングに出かけたり、乗馬クラブに行ったり

と、とにかく乗る事が大好き。友人を勧誘してブリャナ遊撃隊を結成し、ｔ―３４／７６に搭乗する。
本名は須磨ルナ
『サラ』
自主管理教育組合１年。
元々はエヴォ塾に入学する予定だったが、統合の為自主管理教育組合初年度の生徒になる。中学時代に戦車道をやっていた為に入部し、Ｈ３９に搭乗する。登山部のチームと連合を組み、山間部での戦闘と予備兵力としての役割を担う。
本名は稲戸波
『ポド』
元五律工業高校付属中学校登山部。２年生。
野比の誘いで戦車道部に入部し、自主管理教育組合登山部たちと共に、Ｈ３９に搭乗。搭乗員が登山部という事もあって、稲戸と連合を組み山間部での戦闘と予備兵力を担う。
本名は黒山利津保
『スッコ』
自主管理教育組合１年生。
ベオにスカウトされ、戦車道へ入部。ＴＫＳ３両を任され、ヴェルギナ偵察隊として情報収集を担う。
本名は黒水真紀

テキーラ女学園

食欲の秋と言うが、昨日は船のバイキングを楽しんだし
芸術の秋と言うも、適当に絵をかいて現代芸術と名付けておけばそれでよし
スポーツの秋と言うは、最早引退した身
読書の秋と言うに、愛読書は新刊を待つばかり
やはり、いついかなる季節であっても昼寝というのは気持ちの良いものだ
前いたとこではそうもいかなかったから、今を楽しまなければならない
波の揺れがきつい部屋だが、気にする事は無い。ゆりかごと思えば
「おい！嬢ちゃん！もうすぐ着くぜ！」
「……うん」
人が寝ようとしている時に、と悪態をつくのは自身が性悪だからであろう
荷物は全てまとめていたので、部屋から出る
船員があちらこちらを移動している。ご苦労な事である
『元』戦車乗りとなったが、船乗りになる気がどうにも起きなかったのは多忙を嫌っていたからだろうか
甲板に出ると、巨大な船が見えた
メキシコをモチーフとした学園艦。テキーラ女学園
「お客様！　お荷物の方を…」
「いや、良い。気持ちだけいただいておく…あぁ、よければ入艦管理所を教えてくれないか？」
帽子を深々とかぶりタラップを降りる
我が晴れやかな青春はこのテキーラ学園からリスタートするのだ
入艦管理所へ向かうと、人がごった返している
「お名前と入艦目的を」
「古葉千恵美。転校してきた」
「転校…手続きの方は？」

「もう済ましてある」
ポケットから封筒をとりだす
職員が中を見ると仏頂面から一転、笑顔で判子を強く推した
「ようこそ！テキーラ女学園へ！今より2年間、青春はあなただけのものです」
「ありがとう」
こうして、私こと古葉千恵美はテキーラ女学園の生徒となったのである

1ヶ月経った
大いに馴染めたと言える
友人だと言える奴は沢山できたし、部活動にも入っていないからその分時間を有意義に使える
現にこうして放課後に、学園艦内をどことなくブラブラしている
「……」
そうこの1ヶ月で分かった
私は戦車道から、目を背けることができない
そもそもあの学校を離れた理由も、所詮は校風が合わなかったからだ
新しい青春と思い、ここぞと戦車道をきっぱりやめてみたが、結局今年の大会を注目しているのは事実だ。特に、あの学校を
かくして入部を決意、戦車道復帰を志したは良いものの、このテキーラ女学園戦車道部の噂はお世辞にも良い物とは言えなかった
友人は「油臭いじゃん！やめときなよ」と言っていたし
担任に至っては「入部は止めないが、あのクラブは活動しているとは言い難い状況だぞ」
と、まぁ散々な言われようであった
さて、それを見聞する訳だが……
「撃て！」
戦車道練習場と書かれた門の前に着くと、砲声が鳴り響いた

良かった。ちょうど活動中のようだ
「もう一回だ！撃て！」
「……」
なるほど
確かに散々な戦車道部だ
ビッカースC型中戦車。粗悪な品だとは言わないが、いささか古い戦車だ
おまけに車長は、ポンチョの色を見る限り、私と同じ1年生の様だ
練習場に入り、戦車へと近づく
「なんだ、お前は!?」
「お邪魔しますよ。もっかい撃ってくれるか？」
「…おい、装填しろ」
「射角をもう少し…2度上げろ。そうすりゃ当たる」
隊長さんはこちらの注文に舌打ちしながらも聞いてくれる
「撃て……あっ」
自分史上この上ないドヤ顔をしているであろう
隊長さんは今でもビックリした顔で的を見ている
「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるって言うがな、そう言うのは鉄砲の数を揃えてから言うもんだ」
「ま、待ってくれ！」
背を見せて歩き出すと、隊長さんが降りてきて私の肩を掴んだ
良い笑顔をしている。ビジネス上の
「分かったぞ、あんた戦車道をしていたな？」
「まぁ、それなりに」
「どこへ向かう？」
「入部届を出したいんだ。部室はこっちかな？」
「い、いやこっちだ！是非とも来てくれ！」
ビッカースに乗せられると、ドナドナと部室へ連れていかれる
隊長さんはいそいそと部室へ入っていった
「あれ～、どこにやったかなぁ。確か、このへんに…」
「おい、あいつはいつもあんな感じなのか？」

「嬉しいんだよ。入部希望者なんてあんたぐらいなもんだからなぁ」
「いきいきしてやがる」
装填手に聞くと弱小部活動の悲哀を感じる
すると、隊長が入部届を大事そうに持ってきた
「ほら!ここに、ここに名前と住所と電話番号と性癖を……」
「あいあい」
この時、テキーラ女学園戦車道部わずか6名

「こりゃ、たまげた」
「どうだ! 凄いだろ! 由緒ある戦車の保有数だけならどこにも負けないぞ!」
格納庫に案内してもらうと、見渡す限り古い戦車ばかりであったで
あった
第一次世界大戦から戦間期にようやく出てきたシロモノばかりだ
戦車道というより、博物館を開いた方がよっぽど利益があると考えてしまう
「しかし、なんでこんなに? 部員は5人しかいないんだろ?」
「あぁ、それなんだが……」
話が長くなったのでまとめると
戦車道部創立当初、その珍しさから人は確かに集まった。しかし、その人数に見合う戦車を揃えることは困難であったために、比較的安価であった第一次世界大戦から戦間期に開発された戦車を丸々全部買い取った
だが、高性能な戦車というわけでもなく、まして骨董品のような戦車ということもあってモチベーションは低下の一途をたどった。
部員は減少に減少を続け、今年度に入って部長をはじめ多くの部員が辞める事になった
それでも残ったのが、現部長バーラであった

中学からやってきたという自負が、進学による上下関係によって逆転されるであろうと考えた彼女にとって、現在のテキーラ女学園戦車道部の有り様は予想できなかった事であった
「なにか大会に出る予定でもあるのか？」
「恥ずかしいが、無い。タンカスロンでもと考えたがー……いや、性能としても危ういだろうな」
バーラは部の運営に対して様々な葛藤を抱えていたが、その最たるものが戦車そのものの性能であった
「予算の申請は？」
「通ると思うか？　たった5人のクラブの意見なんて」
「まぁ、そうだわな」
しかし、学校としても迂闊に廃部する訳にもいかなかった
これら骨董品の処理にかかる費用もさる事ながら、戦車道部創設を決めたのは現在の理事長でもあり、簡単に廃部にしてしまっては理事長の判断が疑われると言う背景が、いわば戦車道存続の糸であった
「売れば良いじゃないか。幸いにも数だけはある。かつて2両しか作られなかった戦車すらここにはあるんだ。好事家、あるいは他校の戦車道部にふっかければ、これより良い戦車は……」
「それはできない！」
「……」
「今ここにある戦車たちは、決して考えられて購入されたわけではない。予算の妥協によって買われた安価な戦車だ。だからこそ、大切にしないといけないんだ！　いつか、きっとこの戦車で強豪校を打ち破る……それがテキーラ女学園戦車道部のあるべき姿なんだ」
「無理だな。売った方が良い」
考えるまでも無く、千恵美はその意見を否定した
しかし、バーラにとっては慣れたものであった
何度も言われてきたからである
「いや、少なくともこの戦車で何度か1回戦を勝ち上がった事だって」
「何回だ？」
「……1回だけだ」

「じゃあ、なお売るべきだ。数少ない一例に頼って、百戦を逃がしては意味がないだろ」
「それはそうだが……!?」
それでもなお反論し、詰め寄ろうとしたバーラは顔を掴まれた
「や、やめろ！」
「なぁ、隊長さん。私はあんたがそうするっていうなら従うさ。なにせ、隊長のドクトリンに従うのは組織として当然だからな」
「……」
「だが、指摘はさせてくれ。私たちは掃除をしに来たんじゃない」
その言葉にバーラの中で何かが崩れた
同時に新たな葛藤が芽生えた。果たして、自分は本当に戦車道をしているのかという疑問である
気づくと、あの不敵な新入部員はすでに目の前から姿を消していた

1週間後の事である
人工とはいえ河原で昼寝をしていた千恵美の隣にバーラが座り込んだ
「決めた事がある」
「ほう」
「戦車を売る」
「ほう」
バーラの顔を見ると未だに悩んでいる節があるのを感じ取った
千恵美は理解した。後押しが必要なのだろうと
「ビッカースは！　ビッカースだけは…残す。いや、残させてくれ」
「あんたは隊長だ。頭下げるな」
「性悪め」
「それで？　買い手はいるのか？」

「理事長に頼んだ。好事家の知り合いに売るらしい。もっとも、それでも4両しか売れないようだが……」
「充分さ、それで何を買うんだ？　まさかポケットマネーに入れる訳じゃないんだろ？」
「それをお前に聞きに来た」
千恵美は目をつぶった
自分が持ちうる戦車の知識、経験を総動員させる
何が良いか、どれがこの学校に向いているのか
「決まったら教えてくれ」
「…メット」
「え？」
「コメットだ。コメットを買え」
コメット巡航戦車
この戦車を契機に、テキーラ女学園戦車道部は強豪ひしめく戦車道の大会へと殴り込みを行う事になる

テキーラ女学園２

「こんな所にいたのね」
「レオンか」
今日行われた自主管理教育組合との練習試合は実りあるものであった
向こうも向こうで急ごしらえのチームと聞いていたが、互いに互いを撃破し、遂には隊長同士の一騎打ちであった
結果はこちらの敗北であるが、良い試合であったのは間違いないはずだ
「…強くなったわ。この試合で」
「あぁ」
「だけど、まだまだいける」
練習試合のおかげで、他の２校から新たに練習試合の要請が来た
バーラはそれに二つ返事で了解したと言う
これで良いのだ
「お前に聞きたいが、なぜそこまでバーラを英雄に仕立て上げる」
「革命を達成するため！　なんて言えば心地よいものだけど、転校した以上はただの隊員では終われないと思っているからよ」
「落ちこぼれの掃き溜めって感じだなぁ。私はあそこから、お前はプラウダから」
「何なら黒森峰とサンダースから引き抜く？」
「これ以上、落ちこぼれを増やしちゃ救いが無いだろ。私たちはこうやって裏方でコソコソしておくのが一番なのさ」
バーラが内外から部の代表として扱われるのは、こうした両名の配慮によるものであったと言える
「そろそろ公式試合に打って出ても良いんじゃないかしら？」
「それを考えていた。２校から練習試合の申し込みがあるんだろ？
そこで『良い試合』をもう一度してからだな」
「なるほど……バーラには作り笑顔をいっぱいしてもらわなきゃね」
「そうだ。バーラはまさにテキーラ女学園戦車道部の顔だ」

バーラの権限を以ってすれば彼女たち2人の意見を退けるなど簡単であったであろう
しかし、バーラは優しい女の子だ
この戦車道部『革命』の為に、提案と実行の立役者でもある2人の意見を無下にする事はできなかった
「先輩方、そろそろミーティングが始まります。部室までお戻りください」
「おぉ、副隊長。分かったよ」
副隊長は一礼をして、先に部室へと向かった
ダイナマイトとレオンもその後に続く
「聞きたいことがこっちも一つあった。お前は、この戦車道部の今後をどのようにお考えで？」
「言っては何だけど、あの副隊長がこれからを引っ張る事になるでしょうね。というより、あの子じゃないと困る」
「私達に唯一近く、そして学び取っている。問題は奴の後だが…まぁ、それは鬼が笑うだけだ」
副部長の泰然自若とした態度から、2人は何かを読み取っていたが口にする事は無かった
彼女は1年、戦車道の初心者であるが、バーラ、ダイナマイト、レオンの三者三様の特性をうまく呑み込んでいる
バーラは目の前の事でてんてこ舞いだが、それは後継者選びを気にしなくて良いと言う余裕がある故かもしれない
「みんな！今日はよく頑張ってくれた！負けたのは事実だが、戦力差を覆せたのも事実だ！また、明日から頑張ろう！」
「「「「はい！」」」」
部室に入るとちょうどバーラが部員を激励した時であった
ミーティング途中に入ってきた2人に怪訝な目が向けられる
「お前らなぁ、時間厳守だぞ」
「大目に見てくれや。試合の後はボーっとしたくなるんだから」
「後輩が見ているんだ。ダイナマイトはともかくとして、レオンまで遅れてもらっては示しがつかん」

「ごめんなさいね」
「まったく。さぁ、気を取り直して！　今日の試合では何と言っても副隊長とレオンのコンビネーションが……」
ミーティングでは、バーラやレオンから試合の分析を説明され、副隊長が明日以降のスケジュールを話す形で終了した
その間、ダイナマイトは外を見て上の空になっていた
特に誰も注意しないのは、ダイナマイトの性格を知っているが故であろう
「よし！　じゃあ今日はこれで解散！　明日は休みにするから各自身体を休めるように！」
明日が休みという事もあって、部室を早々と出る者が多い
となると、残ったのはいつもの面子であった
「中々、様になってきたな」
「お前たち2人のおかげだよ。まだまだ規模は小さいし、戦車もそろっているというわけではないが……戦車道をしているという実感をようやく持てた」
「それは良かった。まぁ、私がやったのは戦車変えさせて、コメットに乗る用の後輩連れてきたぐらいだけどな」
「それだけでもさ！　吹っ切れることができたのはお前のおかげだし…あぁ、勿論レオンにも感謝しているぞ！　部員集めに、戦略上の指示、どれも私ではできないことばかりだ」
「ありがとう。だけど、謙遜はやめなさい。例え私のおかげだとしても、隊長はあなたなんだから」
不意に、部室の扉が開いた
帰った筈の後輩が息切れしている
「どうした？何かあったのか？」
「た、隊長！　と、とにかくついてきてください！」
「え？　あ、お、おい！」
後輩の笑顔に気圧されてしまい、腕を引っ張られていくバーラ
ダイナマイトとレオンも、何か示し合わせたかのように視線を合わせ、部室から出た

「皆さん！　連れてきましたよ！」
「連れてきたって……一体、何がってうわっ！」
　練習場の外に連れ出されたと思ったら、唐突にカメラのフラッシュがバーラの視界を覆いつくした
「新聞部です！　あなたが隊長のバーラさんですね！　先ほどの試合拝見させていただきました！　とくに最後の一騎打ちなんかは……」
「バーラさん！　さっきの試合すっごいかっこよかったよ！」
「生徒会広報の者です！　今後の試合についてご意見を……」
「え、え、あ、ちょ、ちょっと待ってください！」
　バーラは後ろでニヤついてるダイナマイトとレオンに詰め寄った
　自分をここまで持ち上げようとするのはこの２人しかいないからだ
「お前らの仕業か」
「良い試合だったって事だ」
「弱小クラブが戦車を導入するには、というよりその大義名分を得るには、試合の実績より部員の数を集める方が楽なのよ。イメージ戦略は大事よぉ」
「だからと言って、これはやり過ぎだ！　さっきの試合にしても勝ったわけじゃないのに……うわっ！」
　頭を抱えるバーラを、ダイナマイトがギャラリーの前へと押し出した
「それでも良いのさ！　なんにせよ、あんた名と顔はこの学校に知れ渡った！」
「お、おい！離せ！恥ずかしいだろう！」
「喜びな！　あんたは今やテキーラ女学園の憧れとなった！」
　ギャラリーがバーラを飲み込み、誰に肩車をされたのか祭り上げられていく
「私はそんなつもりで戦車道をしているんじゃない！　ただ戦車道がしたいだけなんだ！」
「バーーーーーーーーラーーーーーーーーーー！」
　ダイナマイトがバーラの名前を叫びあげると、ギャラリーのボル

テージが一気に上がった
バーラの葛藤やプレッシャーなど誰も気に留めない
テキーラ女学園の急激な戦車道強化の原因は、この歪さにあると言えるのである